

はやし かずみ

【愛の友協会特別賞】 林 一美

芥川龍之介恋文大賞、入賞、表彰式の案内が届いた。

文章の送り先が「長生郡長生村」と言う地名を見て、誰が名付けたかは知らないが、長生きを願ってか、百才越えの長寿者が多いからか、何れにしろ、長生村にあやかって長生き出来るかも知れない。一度訪れたいと思っていた矢先の嬉しい案内だった。

高齢につき息子を保護者にして出掛けた。村の駅で「ジョーソーイチノミヤ」までと言ったら駅員がしばらく時刻表あちこちめくっていたが「そんな駅はない。」

嬉々として出かけたのに駅が潰れてしまっては行く術はない。

止むなく踵を返したら「カズサイチノミヤならある。」と駅員、

「それじゃそこでいい。」と切符を買って乗り込んだ。

東京駅で一苦労、やっとの思いで「ガイボー線」早春の房総半島もう初夏の気配、

駅前の食堂で昼食、なんと出て来た品物は当地の3倍の量、

千葉のスケールの大きさに圧倒された。

表彰式で大賞受賞し、寺門氏と一宮館女将に直に接し、人柄の奥ゆかしさに圧倒された。

寺門氏と私はほぼ同期の桜、彼の歩んで来た人生の足取りは何ひとつ知らなくても

すべて分かった。顔で表情で目で……一宮館の女将にはペア宿泊券を使つての

無料宿泊者なれど、行き届いたおもてなしを受け、息子ともども帰り際睨が濡れた。

以後一宮館館主から毎年年賀状などが届く。

九十九里浜の雄大な景観がその都度思い出される。90才過ぎても年を忘れ、毎年恋文大賞に応募している。昔のような入賞通知が届くことはない。

過ぎ去りし人生の一齣、一宮館での一刻のドラマ、思い出に生きる境地に入った老人にはこれほど至福の一刻はない。

かなうなら愛の友協会のお嬢さん達、長生村の空気、一宮館の女将、再会の奇跡を期待して、

100才までは恋文大賞に応募しつづけたいと希っている。我が恋人は房総にあり。

（岐阜県／90歳／男性／農業）

社会福祉法人愛の友協会

※【愛の友協会理事長賞】【愛の友協会特別賞】は、愛の友協会として入賞としました。